



TITLE:

ローティの大学教育論についての 考察：偉大なる文芸作品を読むこと の意味

AUTHOR(S):

中村, 夕衣

CITATION:

中村, 夕衣. ローティの大学教育論についての考察：偉大なる文芸作品
を読むことの意味. 京都大学高等教育研究 2008, 14: 133-144

ISSUE DATE:

2008-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/70821>

RIGHT:

ローティの大学教育論についての考察

—偉大なる文芸作品を読むことの意味—

中 村 夕 衣

（京都大学高等教育研究開発推進センター）

Richard Rorty's View of University Education: On the Meaning of Reading Great Works of Literature

Yui NAKAMURA

(Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University)

Summary

In this paper, I explore the philosophy of Richard Rorty in terms of its criticism of universities and university education. His idea of a university education is developed especially in relation to what he calls “individuation,” and this is based on his view of philosophy in a time of “post-philosophy,” i.e., based on a conception of philosophy as edification. In this context, the importance attached to “conversation” can clearly be seen; it is engaging in conversation that helps students become critical. In light of this, Rorty’s position has been used to support the idea of citizenship education or multicultural education. While such educational practices typically emphasize the importance of conversation, however, they typically do this without considering what it is to read texts within a university education. Rorty has also discussed the significance of reading texts in his 1996 essay, “The Inspirational Value of Great Works of Literature.” Reading this paper in light of his criticism of both the cultural left and analytical philosophy makes it possible to better see the difficulties that confront universities in the post-philosophy period, the period with which Rorty is most concerned. Furthermore, this paper creates a way of addressing the question of what it means to read such texts during this period.

キーワード：R・ローティ、ポスト哲学、偉大なる文芸作品

Keywords: Richard Rorty, post-philosophy, great works of literature

1. はじめに

現在の大学改革は、学生のニーズを重視する方向で進められている。ユニバーサル化の時代にあって、かつてないほど多くの学生が大学に進学し、その結果、多様な興味や関心をもった学生が大学に押し寄せている。少子化のなかで生き残りをかけるためにも、大学は、こうした多様なニーズをもった学生のニーズに応えなければならない。このようにみると、学生のニーズを重視することは、ユニバーサル化という時代に応じた、あるべき改革の方向性であるといえよう。

だが、「学生のニーズへの対応」ということを大学が掲げるのは、学生に何を学ばせるべきか、ということ、積極的に提示できないでいることの現われではないかとも考えられる。というのも、「学生のニーズへの対応」という言葉の背後には、大学で行っていることの積極的な意味を見出せない状況があるとみることができるからである。それは、単に大学教育の理念が不明瞭になったことばかりではなく、大学自体の存在意義が不明瞭になっているという状況である。

明治以降、日本の大学の存在意義は、たとえば「フンボルト型大学」という言葉に象徴されるように、西欧近代の思想に多くを負ってきた。ところが1970年代以降、次第に近代社会と近代思想の正当性が問いなおされている。いわ

ゆる「ポストモダン」と呼ばれるその思潮は、近代の思想を支えにしていた大学の理念にも反省を迫るものであった。そのことは、ポストモダンの旗手として知られる J-F・リオタールが『ポスト・モダンの条件』のなかで、ポストモダンを大学制度の危機と重ね合わせて議論していることから見て取ることができる (リオタール 1989)。このように「ポストモダン」という思想的な流れと、大学の存在理由の不明瞭化とは密接な関係にある。

こうした状況を踏まえ、本稿では、現代の大学の存在意義、すなわち近代の大学の理念が失墜して以降の大学の存在意義を模索した論者として、R・ローティの議論を考察する。ローティといえば、教育学よりも哲学や政治学の分野で注目されることが多い論者である¹⁾。たとえば「ネオ・プラグマティスト」や「ポストモダニスト・ブルジョア・リベラリスト」といった呼称は、現代を代表する哲学者、あるいは左派の代表的な論客としてのローティの立場を示している。したがって、一見するとローティの議論は、哲学という分野でのみ通用するかにみえる。さらに、ローティが大学教育について直接言及した論文は数本しかなく、大学教育が彼の研究の主題であったとはいいがたい。

それにも関わらず、本稿でみるように、彼の思索全体を、大学批判あるいは大学教育論として捉えたと、また別の側面をみることができる。そこに見えるのは、近代の大学のあり方の限界を認識し、そのうえで現代の大学が抱える困難さにも向き合いながら、大学教育について思索したローティの姿である。

本稿では、このような見方からローティの議論を捉えるにあたり、まず、これまで一般的に知られているローティの大学教育論と、その背後にある彼の哲学史理解を考察する。これまでローティの大学論として取り上げられてきたのは「教育、社会化、そして個人化」という論文である (Rory 1990a)。なかでも「個性化 (individuation)」と「啓発 (edification)」といった概念が注目され、大学教育における「会話 (conversation)」の重要性が指摘されてきた (Arcilla 1995)。こうした発想は、たとえば学生の批判的な思考力を育成するためには、教師との会話を重ねることが重要である、といった考えを支持する。会話による批判的な思考力の育成を重視するこのような議論は、市民性教育や多文化教育の一環に大学教育を位置づける傾向を生み出す。そして、大学教育のなかで会話が重視される場合、古典の読解など、テキストを読むという経験が軽視されがちになる。

だがローティは、1996年の論文、「偉大なる文芸作品が与えるインスピレーションの価値」(以下「偉大なる文芸作品」と略記)のなかで、「偉大なる文芸作品 (great works of literature)」を読むことの重要性についても議論している (Rorty 1998)。この論文のなかでローティは、近代の大学の理念を放棄して以降の大学が抱える問題を見出し、それを乗り越える方途を模索していると考えられる。

以下では、ローティの議論を大学論という視点から捉え、彼が直面した課題を明らかにしつつ、現代の大学において「古典を読む」という経験がどのような意味を持ち得るのかを考察したい。

2. 「啓発」の教育 一個性化の段階一

ローティは、「教育、社会化、そして個人化」という論文のなかで、教育をめぐる右派と左派の対立点を明らかにした。そして彼は、この対立の解消を図りつつ、自身の大学教育論を述べている (Rorty 1990a)。その議論をまとめると次のようになるだろう。

右派は、伝統的な価値規範を内面化すること、すなわち「社会化」することを教育の重要な要素とみなす。反対に左派は、そうした伝統的な価値規範が自由の実現を妨げているとみなし、個々人がそうした伝統的な価値規範を批判的に捕らえていくこと、すなわち「個性化」することを重視する。そこで、ローティは、こうした対立図式を乗り越える策として、教育を二つの段階に分けて捉えることを提唱し、社会化を初等・中等教育で担うべき事、個性化を大学教育で行うべき事であると規定する。具体的にいうと、初等・中等教育は、伝統的な価値規範など現在の社会で共有されている事柄を学ぶ段階であり、大学教育は、自分たちが社会化して身につけてきたものが暫定的なものであるということに気づき、社会をよりよくしていくことを知る段階であるとされる。

ローティは、このような議論の立て方をするなかで、E・D・ハーシュと A・ブルームの議論を取り上げている。ハーシュとブルームは、しばしば保守派として同じカテゴリーにくくられることがある (Bernstein 1988)。だがローティは、両者の間の違いを強調する。

ハーシュは、アメリカの教育における共通の知識の欠如を問題視し、高校までに学んでおくべき事柄のリストを作成した (ハーシュ 1989)。ローティは、ハーシュの議論を中等教育における社会化の段階を重視した議論であるとみ

なしている。他方、ブルームは同時代の大学の知的状況を批判し、グレート・ブックス、すなわち西欧の古典を重視することを求めた (Bloom 1987=1988)。ブルームは必ずしもローティの規定する社会化の文脈において古典を重視しているわけではないのだが、少なくともローティは、ブルームが大学において社会化を求めているとみなし、その点で誤っているという。

以上のような議論に基づき、ローティは大学教育を「個性化の段階」と規定している。個性化の段階では、社会化で身につけた価値基準が絶対的なものではなく、あくまでも暫定的なものにすぎないことに気づくことが重視される。なぜ、そうした気づきが重視されるかといえ、現在の社会が暫定的であることに気づくことができれば、未来に向けて社会を改良していく可能性が開かれるからである。この改良可能性に気づき、未来を切り開いていこうとするようになることを、ローティは学生に求めるのである。

そしてローティは、学生がこのように個性化の段階を進むために、教師と学生間のエロスの関係が不可欠であるという。「エロス」については、ブルームもまた同時代の学生に強く求めた欲動である (Bloom 1987=1988)。そのため「エロス」は、両者に共通する関心の在処を示す概念であるとみなされることがある (柳沼 2002)。

しかし両者の間には相違がある。ブルームがエロスについて語る際には、真理への愛が強調されるのに対し、ローティの場合、エロスはあくまでも「理論化できないもの」として扱われ、エロス自体がどのような欲動であるかについての議論はない。ただ学生の成長という結果のみが、エロスの所在を証するというロジックになっている。したがってローティは、「そうしたエロティックな関係は、成長の機会であり、それらの出現と発展は、成長自体と同じように予測できないものである」というにとどまる (Rorty 1990a)。

このようにエロスを語る際にも「真理」について語らないことは、哲学を語る際に「啓発」という概念を重視し、「対話」ではなく「会話」という概念を重視するローティの「哲学史観」に由来している。

1979年に出版され、ローティを一躍有名にした著作、『哲学と自然の鏡』において、彼は「ポスト哲学」の時代の哲学の可能性を模索した (Rorty 1979=1993)。「ポスト哲学」というときの「哲学」とは、形而上学としての、すなわち「超越論的」な哲学を意味する。「ポスト哲学」の時代とは、「形而上学」あるいは「超越論的哲学」が終わりを告げ、無効となった時代を意味するのである。したがって、「ポスト哲学の時代の哲学」は、形而上学としての哲学、超越論的な哲学とは異なる種類の「哲学」でなくてはならない。

こうした「ポスト哲学」の時代を切り開き、新たな哲学の可能性を模索した人物としてローティは、ハイデガー、ヴィトケンシュタイン、デューイに注目した。彼らはいずれも形而上学の限界を認識し、オルタナティブを希求した哲学者として描かれている。三人ともそれぞれに若い時期に、哲学を「基礎学」とすることを試みた。哲学が諸学を基礎付ける「基礎学」として打ち立てられる場合、より体系的かつ普遍的な真理を探究することが目指される。しかしここに挙げられた三人は、一旦はそうした試みをしたうえで、その限界に気づき、「構築的であるよりは治癒的であり、体系的であるよりは啓発的」な哲学、すなわちポスト哲学の哲学を希求したとされる。

ローティは、このように三人の哲学者を挙げつつ、形而上学的な哲学の放棄を宣言する。その際に強調されているのが「歴史主義」という立場である。ここでいう歴史主義とは、ある特定の時代や社会を超えて普遍的な真理があるという見方を否定し、真理でさえも特定の時代と社会のもつ枠組みのうちで解釈されたものにすぎない、と考える「解釈学」の発想をよりどころにしている。解釈学の発想をもって歴史主義の立場にたてば、歴史を超えた普遍的な真理を探究するという従来の哲学の営みは意味を失ってしまう²⁾。

解釈学的な発想をすると、あらゆる事柄の理解はある特定の解釈の枠組みに基づく。ローティは、このような解釈する側のもっている枠組みを強調して、「エスノセントリズム」という概念を用いている (Rorty 1991a)。エスノセントリズムは、「自文化中心主義」あるいは「自民族中心主義」と訳される。この訳語からわかるように、一般的には否定的な文脈のなかで用いられている。だがローティはこの概念を肯定的に用いる。彼がエスノセントリズムという概念をもって強調するのは、私たちは自分たちの社会がもっている解釈の枠組みを越え出たところの「真理」を扱うことはできない、ということである。私たちにできることといえば、ただその枠組みのなかで「真理」がどのように正当化されているのか、ということを知ることである (Rorty 1991b=1999)。

そして、ポスト哲学の哲学が、啓発的であるということも、この解釈学の発想に由来している。「啓発」とは「慣れ親しんだわれわれの周囲世界を、新たな発想による見慣れぬ用語によって再解釈しようとする試み」である、と

ローティはいう (Rorty 1979=1993)。真理の探究に代えて求められるのは、自分たちがすでに親しんでいる解釈の枠組みに揺さぶりをかけること、揺さぶりをかけて新たな発想をもたらすことである。真理を探究するなかで体系的な枠組みを構築し、それをもって社会を基礎付けるのではなく、「会話」のなかで普段使っている語彙を再解釈していくこと、すなわち新たな体系を構築しようとするのではなく、何か問題について「治癒的」に関わることが、ポスト哲学の哲学が担う重要な役割となる³⁾。

このように「啓発」の発想に基づき「会話」それ自体を重視するということは、ローティの思想の「核」であると考えることができる。そして「啓発」という概念は、ローティが「ポスト哲学の哲学」を語る際のキーワードとなっているだけでなく、「教育」という用語に代えて用いられているところに特徴がある。そのため大学教育の「個性化」の段階で重視される教師と生徒の間の「会話」も、「啓発」というローティが求める「ポスト哲学の哲学」の議論によって補強される、とみなされてきた (Arcilla 1995)。つまり「個性化」というローティの大学論の前提には、彼が取り組んだ哲学の課題があるというわけである。

しかしながらローティ自身、こうした見解について否定的な態度をとっている。つまり、自分は哲学によって教育を基礎付けようとはしていない、という (Rorty 1990b)。反基礎付け主義の立場にたつローティにとって、哲学の領域で取り上げた問題と、教育の問題として語ったこととを、前者が後者の基盤となっている、という形で理解されることは、自身が拒否した枠組みで自分の研究を理解されることにほかならない。

とはいえ、ローティがそのように基礎付け主義的な観点から、彼の哲学における議論と教育における議論をつなぎ合わせることを拒否したとしても、『哲学と自然の鏡』のなかで「教育」という言葉に代えて「啓発」という概念を用いているからには、依然として、彼が哲学の問題を議論する際の枠組みと、彼が教育について議論する際の枠組みとに、共通した特徴をみいだすことはできるだろう。また「個性化」をコンセプトにした大学教育論が1980年代を中心に展開されたことを考慮すれば、それが1979年に出版された『哲学と自然の鏡』で描かれた哲学史観や課題のうえに展開されているとみることができる。

しかしそれでもなお、ローティの大学論を捉える際、「個性化」というコンセプトのみに注目することには限界があると考えられる。というのも、教育を「社会化」と「個性化」という二つの段階から捉える議論は、あくまでも政治的右派と左派の対立を解消するということを目的として展開されており、たとえばその段階の接続はどのようにされるのか、などは深く議論されていない。

とすれば、ローティの議論を大学論として考察する際には、「個性化」など、彼自身が大学教育について直接言及している箇所を手がかりにするのではない方法が求められる。そこで以下では、彼の議論の全体を「大学論」という視点から焦点をあてることでローティの大学論をみていくこととする。

3. 二つの大学批判 ―ポストモダニズムの隘路―

ローティの研究を年代ごとに追ってみると、1980年代後半から徐々に扱うテーマが変化していることがわかる。もちろん、それを変化と捉えずとも、以前からの問題関心の深化とみることもできなくはない。いずれにせよ1990年代の講演や論文をまとめた本、『アチーピング・アワー・カントリー』では、扱われている事柄がそれ以前とは異なっている。

ローティの議論のこの「変化」については、ローティが政治哲学へ関心を持ち始めた、と理解する論者もいれば、もともとローティが抱えていた異なる関心が順に現れた、と理解する論者もいる (浜野 2000、三島 2001)。あるいは『アチーピング・アワー・カントリー』というタイトルからも推測されるように、この著作では、国家の枠組みが重視されているため、ローティが国家を機軸にして政治を捉えるようになった、とみる論者もいる (仲正 2004)。

ローティ自身は、あるインタビューのなかで「この本では全く哲学について扱っていない。それは政治的な論争にすぎない」と語っている (Rorty 2006)。この発言にも、教育と哲学が無関係であることを強調した発言と同様、ローティの反基礎付け主義を固守する態度をみることができる。もちろん、彼が哲学によって政治を基礎付けようとしたわけではないということは、その通りであろう。しかし、それにも関わらず、逆にローティの「政治的な論争」を、彼が哲学の領域で問題とした事柄とまったく無関係なものとして考察することにも無理がある。なぜなら、彼の追及した「ポスト哲学の哲学」は、政治を基礎付ける学としての哲学を批判し、政治に従属する哲学のあり方を示したも

のであるからである。すなわち、彼の哲学に関する議論のなかに、あらかじめ政治とのかかわりが含みこまれているのである。

本章では、この『哲学と自然の鏡』から『アチーピング・アワー・カントリー』に至るローティの「変化」を、「哲学から政治へ」という見方とは異なる側面から捉えなおし、ローティの議論全体を大学批判として読み解く。さらに、ローティの議論を大学批判という視点からみることで、1996年に発表された「偉大なる文芸作品」の議論の背後に、ローティがどのような問題をみていたのか、ということを明らかにすることができると考えられる。

（1）形而上学批判としての大学批判

先にも見たように、『哲学と自然の鏡』における議論は、形而上学としての哲学に対する批判であった。このような言い方をする限り、ローティの議論は、あくまでも哲学というごく限られた分野のなかの限定された文脈でのみ意味のあるものだ、という印象をもつかもされない。しかし、ローティの形而上学批判を一種の大学論としてみれば、彼の議論のなかに、近代の大学の理念に対する批判をみてとることができる。

カントが論じたように、近代の大学の理念においては、形而上学としての哲学がその核となるものであるとみなされてきた（カント 2002）。カントは次のように諸学問を特徴づけ、大学を理解していた。まず、神学、法学、医学などの他の学問分野は、伝統的な規範に基づいており、これらの学問は理性よりも既存の権威に従うことを余儀なくされている。他方、哲学は理性のみに依拠しており、理性を实践することこそが哲学の役割であるとみることができる。こうした哲学における理性の働きこそが、他の諸学問を統合する力を持ちえる、とみなされる。カントが大学の諸学問を統合するものとみなす「哲学」とは、理性による真理の探究という形而上学としてのものであった。

とすれば、ローティの議論を、形而上学としての哲学を柱としてきた近代の大学に対する大学批判として読み解くことは決して無理なことではないだろう。すなわち、真理の探究の放棄というローティの思索は、真理の探究の場としての近代の大学の理念の解体を意味するということである。

さらにローティの批判の矛先は、真理を探究することで権威を保っていた哲学だけでなく、客観性を盾にその権威を保ってきた科学にも向けられている（Rorty 1991b=1999）。彼は、T・クーンの議論を参照しつつ解釈学の知見を援用し、真理も客観性もともに、ある特定の解釈の枠組みのうちの合意に支えられたものに過ぎない、ということを強調する。たとえば、真理はあくまでも暫定的に人々が現在の時点で「真理」だと考えているものである。したがって現在の時点で真理であると思われる事柄も、将来、否定される可能性がある。つまり真理ですら常に誤謬の可能性を孕んでいるのである。同様に、ある事柄が客観的であるか否かは、そのことを客観的であるとみなす解釈を共有する人々の間における合意の強度の問題とみなされる。

こうした発想に基づけば、科学も哲学も、すべて文学のジャンルのひとつとみなされ、科学と哲学、そして文学の間の境界はなくなる。ローティが暴いたのは、真理の探究を目指してきた哲学も、客観性を支えにした科学も、どちらも近代の大学の理念のなかで語られてきたような特権をもつことのできるものではない、ということである。

単にそうした特権を失墜させるだけでなく、真理を探究することや客観性を求めることを放棄すべきだというのが、ローティの主張である。そしてそうした放棄を語ると同時に、彼は、解釈学の発想をさらに進めることで大学の新たな役割を見出している。それが、先にみたような「啓発」としての哲学の可能性である。

ある特定の解釈の枠組みに内在せざるを得ない、という「エスノセントリズム」の立場は、先に見たようにローティが「ポスト哲学の哲学」、すなわち「啓発」や「治癒的役割」を担う哲学の可能性を模索する際の前提となっている。さらにそれは、科学のあり方を捉えなおす際の枠組みともなっている。ローティは、従来の科学のイメージ、すなわち客観性を追及することの模範としての科学のイメージの代わりに、「連帯」の模範として科学の意義を見出す。

ローティは、「科学は、人間の連帯のモデルであるという意味においてのみ、模範である」と述べ、合意の形成を「強制によらずに行う」ことの重要性を指摘する（Rorty 1991b=1999）。先にみたようにローティが採用する解釈学の知見に従えば、ある事柄が「客観的である」とみなされるのは、その事柄を議論する人々の間で「客観的である」という一定の合意が得られていることを示す。そうした合意を超えたところに「客観性」を支える基準があるわけではない。こうしてローティは、より客観的なものの見方を提供することの模範としての科学のイメージを覆し、合意による連帯に、科学の可能性を見出している。

ローティは形而上学としての哲学を批判することで、真理の探究、客観性の追及という理念に支えられてきた近代の大学における学問のあり方を放棄することを求めた。そのうえで、「啓発」や「連帯」という概念を用いて、新たな大学のあり方を提示している。このようにみれば、ローティは「ポストモダンの時代における大学の在り方」の一つの可能性を提示しているといえよう。

これまでも、ローティは「ポストモダン」を代表する論者、ポストモダニストの一人として注目されてきた。しかしながら、ローティ自身はそうした「ポストモダニスト」という理解のされ方に抵抗し、「ポストモダニズム」という概念の限界を露呈させようと試みている (Rorty 1999=1999)。したがって安易に「ポストモダン」という言葉をもってローティの思想を特徴づけることは避けるべきであろう。

それでもなお、少なくとも大学論としてみた場合には、形而上学を批判し、そしてその後の時代の哲学や科学のあり方を求めたという点で、ローティの議論は、ポストモダンの時代の大学のあり方を模索するものであった、と捉えることができる。さらに、ここで注目したいのは、ローティがポストモダンの大学の可能性を模索したこと自体ではなく、そのような試みをしていた彼が、その後、1990年代に入ってからある「変化」をしたことである。具体的に、大学批判の矛先が「形而上学」から「ポストモダニズム」に移ったということである。そして、その変化を捉えることで、なぜローティが「偉大なる文芸作品」について議論したのか、そのことの意味が理解できると考えられる。

(2) ポストモダニズム批判としての大学批判

先にも述べたように、ローティが、1980年代後半頃になってから扱うテーマを、哲学についての問題から政治にかかわる問題へとその焦点を移したということは、自他ともに認めることとなっている。政治的な立場についての発言としては、1983年の時点ですでに「ポストモダニスト・ブルジョワ・リベラリズム」と自称し、反マルクス主義的な左派の立場を表明していた (Rorty 1983)。だがそうした彼の立場がより鮮明に打ち出されたのは、1998年に出版された『アチービング・アワー・カントリー』である (Rorty 1998=2000)。

この著作のなかで、ローティは、「ポストモダニスト・ブルジョワ・リベラリズム」という呼称ではなく「改良主義的左派 (reformist left)」という言葉をもって自身の立場を表明しなおしている。改良主義的左派は、「革命」によってではなく日々の「改良」によって経済的な不平等を解消しようとする人々をさす言葉である。こうした立場を擁護するとともに、彼は、ポストモダニズムの思想的な影響を受けた左派の人々のことを「文化左翼」と呼び、批判した。文化左翼とは、60年代に活躍した左翼の後継者として、大学内で「差異の政治学」や「アイデンティティの政治学」などを専門とし、経済的な不平等よりも、隠された権力構造や文化的な承認について関心をもつ左翼である (Rorty 1998=2000)。

ローティが文化左翼を批判したことと、「ポストモダニズム」という言葉から距離をとりはじめたことは、ほぼ同じことを意味している (Peters 2001)。ローティは、以前には「ポストモダニスト・ブルジョワ・リベラリズム」という言葉を用いて、「ポストモダニズム」という言葉を自身の立場を表す概念として積極的に採用していた。彼が「ポストモダニズム」という概念をあいまいである、という理由で放棄しようとしたのは、その概念がローティの求めた「ポストモダニズム」と、文化左翼が掲げる「ポストモダニズム」との間の違いを示すことができないからだと考えられる。つまり形而上学を放棄した後、どのような道を歩むのかということに関してローティは、大学内にはびこっている文化左翼に同意できなかったということである。

とすればローティは、「ポストモダニズム」が陥るある種の限界を、より丁寧にいえば形而上学を放棄した後に生じる問題を捉えようとしていた、とみることができ⁴⁾。ローティが文化左翼批判という形で示しているのは、形而上学を放棄して以降の大学が抱える問題、すなわちポストモダンの時代の大学が抱える問題だといえよう。では具体的にローティは、どのような問題をみていたのだろうか。

ローティが文化左翼に対して向ける批判のポイントは、まず第一に、彼らが政治的な事柄にたいして傍観者的な態度をとっていることにある (Rorty 1998=2000)。ローティが政治的な事柄、という際に念頭においているのは、具体的な政治の問題、たとえば貧困の解消のための政策である。ローティによれば、文化左翼の人々は単に「アイデンティティ・ポリティックス」や「差異の承認」などを大学内の一部の聴衆に向けた難解な言葉で議論することに終始している。そのため文化左翼の人々は、具体的な政治に関与することができない。

また、文化左翼の議論は、しばしばフーコーやデリダの議論に負っている場合がある。ローティは、フーコーやデリダが「啓蒙主義的合理主義を批判する点でおおむね正しい」としながらも、「私的な完全性を個人的に追求する場合には有益だが、公的責任の問題に関しては、無限なものや表象不可能なものは有害なだけ」と述べ、文化左翼の議論が、公的な問題について関わるができない困難さを指摘する (Rorty, 1998=2000)。

第二の批判は、文化左翼の強調する「差異の政治」においては、国家レベルにおける共通性を見出すことができない、というところに向けられている。多文化主義の議論に象徴されるように、国家の内の「差異」に着目する議論は、国家レベルにおける連帯を支える枠組みを持ち得ない、とローティはみている (Rorty, 1998=2000)⁵⁾。ローティが、文化左翼に対して国家レベルにおける共通性を見出し得ないことを批判するのは、経済的な不平等の解消を重視する改良主義的左派の立場をとるためである。すなわち、経済的な不平等を解消するためには、国家というレベルにおける政治の取り組みが不可欠であると考えられるためである。

このように改良主義的左派の立場を表明し、傍観者であることから文化左翼を批判していることを合わせて考えれば、『アチービング・アワー・カントリー』の議論は、たとえば『哲学と自然の鏡』に比べて確かに「政治的」な議論であるといえる。

しかし、ローティの政治への関心は『哲学と自然の鏡』の時点にも見出すことができるのであって、彼の議論を、哲学の問題と政治の問題の二つに切り離して考えることはできない。というのも、形而上学としての哲学の放棄は、哲学が特権的な立場から政治を基礎づけることへの批判であり、啓発的、治癒的な哲学のありかたを求めたことは、政治に従属する哲学のあり方の模索であったといえるからである。「会話」を継続する中で、既存の解釈の枠組みに揺さぶりをかけるという哲学の役割は、既存の社会を少しでも改良していくという政治の活動に従属している。したがってローティの文化左翼批判は、彼自身が述べるように「哲学をまったく扱っていない」にせよ、だからといって単に彼の政治的な立場、政治的な関心のみに基づいたものとみなすことはできない。

ローティが文化左翼を批判する際、改良主義的左派と文化左翼の間の対立など、いわゆる政治的な関心のみに基づいているわけではないということは、彼が「偉大なる文芸作品」のなかで、文化左翼だけでなく分析哲学をも批判の対象にしていることから分かる。周知の通り、ローティはネオ・プラグマティストとして、分析哲学の知見を援用しながら自身の思索を深めていった⁶⁾。しかし次にみるように、分析哲学が大学ないし哲学科に与えた一般的な影響については否定的な態度をとっている。

ローティは、文学科における文化左翼の広まりと平行して、哲学における分析哲学の影響を捉えている。彼は、H・ブルームの議論を取り上げながら、「多くの新進気鋭の若い文学教師たちは、どんなことでも嘲笑できるが、何も希望できず、すべてのことを説明できるが、何ごとにも心酔できない」と述べ、同じ事態が、論理実証主義および分析哲学の影響下にある哲学科においても生じているとみている (Rorty, 1998=2000)。分析哲学が「精密科学のように無味乾燥に体系的」であることを求め専門化した結果、他の学問分野とも、あるいは社会とも接点を失っていることが批判されている。

こうした文化左翼と分析哲学に共通する問題をローティは「博識 (knowingness)」という概念で捉えている。博識とは、「畏敬の念に打たれても身震いしないようにしている魂の状態」である (Rorty, 1998=2000)。そして博識になると、精密な理論を構築しようとし、過去の思想や出来事のうちに失敗ばかりを見出す態度が身についてしまう。

そのうえでローティは次のように言う。「論理実証主義の勝利によって、わたしの学問分野に取り返しのつかない影響が現れた一哲学という学問分野からロマンスとインスピレーションが奪い去られ、専門的能力と知的に洗練された考え方だけが残った」 (Rorty, 1998=2000)。このような記述から、ローティが文化左翼および分析哲学が繁栄した大学について、最も大きな問題だと考えていたことは、大学の人文科学の世界から「ロマンス」と「インスピレーション」が失われたことだということが明らかになる。

ローティにとって「ロマンス」も「インスピレーション」も、結局のところより良い未来を希望し社会を改良していく、という政治のあり方を実現させるために必要とされることではある。しかし文化左翼と分析哲学に対する批判を、形而上学を放棄して以降の大学が抱える問題としてとらえるのであれば、ローティがこの「ロマンス」と「インスピレーション」の回復を考える際に、「偉大なる文芸作品」の重要性を強調していることに注意を向けざるを得ないだろう。

4. 偉大なる文芸作品の与えるインスピレーションの価値

ローティの「偉大なる文芸作品」のなかの議論を取り上げるには、その前に、まず彼がテキストを読むということをもどのように理解していたのか、ということ把握することが求められる。ローティは「偉大なる文芸作品」以前にも、テキスト論について論じている。そこで、まずはそうした議論を参照しつつ、ローティがテキストを読むということをもどのような事柄として描いているのかを整理しよう。

ローティは「19世紀の観念論と20世紀のテキスト主義」という論文のなかで、現代のテキスト主義を思想史のなかに位置づけ、その意義を考察している (Rorty 1982=1985)。ローティによれば、テキスト主義は、真理を発見するという考え方を放棄するプラグマティズムの立場を徹底させた立場である (Rorty 1982=1985)。テキスト主義の立場から否定されるのは、次のような考え方である。著者は、読者が理解してくれるだろうという想定のもとに、自ら言い表そうとする事柄を言葉で記録する。読者は、著者と自分が共有している知識をもって、著者が意図したこと、言い表そうとしたことを掴み取ろうとし、テキストの言葉の意味を理解する。テキスト主義はこうした考えを捨て、テキストを著者の意図からまったく独立したものとみなす。

そのうえでローティはテキスト主義を「弱いテキスト主義」と「強いテキスト主義」に分けた。弱いテキスト主義とは、テキストを著者からも読者からも独立したものとみなし、テキスト自体がひとつの閉じた構造を持っているとみる立場である。したがって、弱いテキスト主義の議論において、テキストのもつ構造を明らかにしようとするのが読者にとって重要なこととなる。他方、強いテキスト主義は、読み手がそれぞれにもっている解釈の枠組みを、テキストに「押し付ける」ことによって、生まれてくるものを重視する立場である。つまり、テキストを読むのは、それを正しく理解するためではなく、そこから取り出せる何か、を求めてのことである。

そして、この強いテキスト主義はローティ自身の研究のスタイルでもある。彼は次のように言う。「…ジェームズないしデューイの思想に忠実であると主張したりはしない。むしろそれはジェームズやデューイのテーマを私なりに、ときには自分に引きつけて述べ直したものである」(ローティ 2002)。

著者の意図の正しい理解を求めるのではなく、読者のもっている枠組みをテキストに押し付けるこのような読み方に対しては、たとえばそれはテキストを読者が好きなように利用するだけで、よい解釈を生み出さないのではないか、という批判がありうる。しかしローティは、解釈とはすべてある種の利用でしかありえないと考え、利用することと解釈することの間に区別はないとする (Rorty 1999=1993)。

一見、こうした見解をもつローティにとって、テキスト自体がどのような内容のものであるのかは問われないことのように思われる⁷⁾。著者の意図が重視される場合には、そこで理解されるべき意図の良し悪しが問題となり、読むべきテキストとそうでないものとの区別が重要となる。しかし、読み手の側の解釈の枠組みが問題となるテキスト主義の場合には、そうした条件をもたないと考えられるからである。

ところが「偉大なる文芸作品」のなかでローティは、「偉大なる (Great)」という言葉を用いて古典の意義を再解釈している。ローティは次のように言う。「私たちは、文学作品を正統と認める様々な規範 (canons) が一時的なものであることを快く認めるべきである。しかし、だからといって私たちは偉大さの観念を放棄すべきだということにはならない。偉大な文学作品は、それが偉大であるので多くの人にインスピレーションを与えてきたとみなされるべきでなく、多くの読者にインスピレーションを与えてきたので偉大であると見なされるべきである。」(Rorty, 1998=2000)。

ローティは、従来、古典を擁護する際に前提とされていた考え、すなわち古典が偉大であることを自明のこととみなす考えを否定する。ローティにとって、「偉大なもの」は、普遍的かつ永続的であることを意味しないのである。彼は、歴史的な状況によって何が偉大であるかは変わりうることを認めたくて、「偉大」という概念を保持しようとするのである⁸⁾。当然、読み手が置かれた社会状況、時代状況はそれぞれに異なる。そのため、常に読者の枠組みは多様である。にもかかわらず多様な読者にインスピレーションを与え続けてきたテキストがある。とすれば、それは「偉大」と形容されるべき書物ではないか。

このようにローティが「偉大なる文芸作品」のなかで古典の意義を読み替えることを通して、読むべきテキストを限定して捉えようとしていることは、次の記述からもわかる。「文学の正統と認められる作品を定める理由、すなわち『生涯読書することを命じる』作品を定める主な理由は、若者がどこに興奮と希望をみいだしたらよいか、その場

所を若者に提案するためである」（Rorty 1998=2000）。

ここで使われている「興奮と希望」という言葉は、ローティが重視する「インスピレーション」と関連の深い言葉であると考えられよう。ローティは、人々にインスピレーションを与えてきたという事実こそが、文芸作品の「偉大さ」の根拠となる、という。とすれば、「インスピレーション」を得るような、あるいは「興奮と希望」を見出せるような形で、文芸作品を読む、ということとはどのようなことなのだろうか。

ローティは、テキストを、ある文化創造のメカニズムの産物とみなしているときには、インスピレーションは得られない、という。また、そこに何が書かれているのかを知ろうとしてテキストを読むときにも、インスピレーションは得られない。また、著者の意図を詮索することを無意味だと考えるローティにとって、当然、そうした著者の意図を詮索することも、インスピレーションを生み出すことには繋がらない。

このような著者の意図を詮索しつつ読むことや、テキストを対象化しつつ読むこととは異なる読み方として、ローティは、「詩を読む」という表現を使っている。彼は、哲学の論文ですら「興奮や希望を求めて、詩を読むように」読むべきだと言う。詩を読むように、ということ、それは読者がテキストの世界に入り込んだ状態、つまり熱中した状態である。テキストに書かれていることを冷静に分析し、そこに書かれていることを理解しようとする際には、テキストから一步身を引いて、分析者、観察者の視点を持つことが求められる。しかし、テキストの世界に入り込んでいる読者にそうした視点は無いと考えられる。

ここで、先に見たようなローティのテキスト論、すなわち読者のもっている解釈の枠組みをテキストに押し付け、そこで生まれるものを重視する議論と、インスピレーションのつながりをみることができる。まず一つには、テキストと距離をとり対象化する態度を否定し、テキストの世界に読者が入り込むことを重視することは、読者の枠組みをテキストに「押し付ける」ということの言い換えであると考えられる。またもう一つには、「テキストに読者の枠組みを押し付けることで生まれてくるもの」こそが、ここでいうインスピレーションであると考えられる。

さらに、ローティはインスピレーションとロマンスを併記している。その理由は、「ロマンス」という言葉を、物語のなかに身をおくことと理解すると、次のように考えることができる。インスピレーションを得る状態、すなわちテキストの世界に入り込むことが、テキストが生み出すある物語的な世界に自分をおくことを意味する、ということである。「偉大なる文芸作品」の物語的な世界に熱中するということを通して、読者は、普段、自分が身をおいている社会とは異なる世界に身をおくことができる。そこで現実を構成している物語とは異なる「物語」に熱中する。そうした経験が、読者に、現在とは異なる社会への「希望」を抱かせる。したがって、ローティは次のように言う。「わたしが文学作品にインスピレーションを与える価値があると考えるとき、これらの文学作品を読むと、人々はこの世にはこれまで想像してきた以上のものがあると思うようになる、とわたしは言いたいのである」（Rorty 1998=2000）。

ローティの重視するインスピレーションとは、「詩を読むように」読もうとする読者と、「偉大なる文芸作品」が出会った場合に生まれるものである。さらに、こうしたテキストと読者が出会う場として、ローティは大学という場、とりわけ人文科学を重視した。彼は、「熱中する者たちの避難所」という言葉を用いて次のように言っている。「大学の中で、人文科学は何か熱中する者たちの避難所であった。もはや哲学科にも文学部にも何か熱中する者たちのための場所がないならば、彼らは将来どこに避難所を見出したらいいのか検討もつかない。…本の読み方を学ぶとたちまち本をむさぼり読み始め、本によってその命を救われた人々は、哲学科や文学部から閉め出されるだろう。もしそうであるならば、人文科学研究は知識を生みだし続けるだろうが、もはや希望を生み出すことはないだろう」（Rorty 1998=2000）。

このように、偉大なる文芸作品というものの価値を、インスピレーションを与えるという側面から見出すローティは、インスピレーションを求める読者と、偉大なる文芸作品のための場を「避難所」と呼び、大学の存在意義を見出しているのである。

5. おわりに

ローティは、形而上学としての哲学の放棄を宣言することで、形而上学としての哲学を支えとしていた近代の大学の理念に無効を告げた。彼は、ポストモダンの時代の大学のあり方を提示するにあたって、真理を探究するという役割を哲学に放棄させ、自分たちの解釈の枠組みに揺さぶりをかける「啓発」という役割を哲学に担わせた。そして、

そのことにより、政治に従属する哲学のあり方を模索した。

しかし、形而上学としての哲学を放棄することは、必ずしもローティが目指したような「啓発」を担う哲学を実現することにはならない。ローティは、文化左翼の出現に、政治への関心を喪失した大学の姿を、あるいは分析哲学の興隆に、無味乾燥な専門用語が流布する閉塞した大学の姿をみてとったのである。

そして、「偉大なる文芸作品」の議論は、形而上学としての哲学を放棄したローティが直面した課題への対応として理解することができる。ローティは、大学という場が、文化左翼などの傍観者的な態度や、分析哲学の冷めた態度を学ぶ場となってしまっていることに警告を発している。つまり形而上学としての哲学を柱とした近代の大学の理念が失墜していることを考えれば、大学が同時代の社会や政治を基礎付ける枠組みを提示するという役割を担うことはできない。だからといって、文化左翼のように社会に対して自閉し傍観者的な態度をとることや、あるいは分析哲学のように大学内のみに通用するような無味乾燥な専門用語を量産することではいいのだろうか。彼が求めるのは、各時代の読者にインスピレーションを与えてきた「偉大なる文芸作品」を、「詩を読むように」読むことを経験する場としての大学である。それは、テキストの紡ぎだす物語的な世界に身をおくための「避難所」としての大学である。

このようなローティの議論は、政治という領域に大学がいかに関わることができるのか、ということを考える際の手がかりを与えてくれる。もちろん政治へのかかわりといっても、ここでローティが想定しているのは、改良主義的左派という立場、すなわち経済的な不平等の問題を革命によってではなく、日常的な改良によって解消していこうとする立場に基づいた形で提示される「かかわり」である。しかし、近代の大学の理念が失墜した状態にある今、求められているのは、どのような政治的な立場をとるのかを含めて、政治という問題を射程にいれつつ、大学の存在意義を語ることである。とすれば、ローティが提示する「偉大なる文芸作品」からインスピレーションを得る避難所としての大学は、そのような射程をもった議論として、アクチュアリティを孕んでいるといえよう。

註

- 1) 日本の教育学においてローティを扱った議論としては、柳沼良太の議論がある（柳沼 2008）。また、宮寺晃夫は、リベラリズムの再考、という政治学の課題のなかで、ローティを手がかりとして議論をしている（宮寺 2003）。
- 2) この点は、歴史主義を近代性の限界点にみるブルームの発想と、真っ向から対立する。したがって、同じようにエロスということ語っていたとしても、両者の間には根本的な発想の違いがあるといえる。
- 3) ローティは、M・オークショットの影響を受け「会話（conversation）」という概念を用いている（Rorty 1979=1993: 370-371）。ここで会話は、「対話（dialogue）」と区別して用いられていると考えられる。対話が、真理へと導かれる概念であるとしたら、会話はそうした真理の探究という目的をもたず、継続すること自体が目的となるような活動である（野家 1994: 10）。
- 4) 北田暁大は、ローティの文化左翼批判を、基礎付け主義批判であるとまとめている（北田 2003）。ローティは、文化左翼を批判する際に、彼らが「理論を重視しすぎている」という言い方はしているものの、「基礎付け主義に陥っている」という批判を展開してはいない（Rorty 1998=2000: 98）。本文中で次にまとめているように、文化左翼の問題は、基礎付け主義を批判しているにもかかわらず基礎付け主義に陥ってしまっていることにあるのではなく、むしろ、反基礎付け主義の立場が、政治に対する傍観者的な態度を生み出しているということにあると考えられる。なお渡辺幹雄は、「傍観者的」ではなく「観客的」という言葉を用い、ローティの文化左翼批判をまとめている（渡辺 1999: 316）。本稿の観点と同様の見方をしているものには（McLaren and Suoranta 2001: 146）がある。
- 5) ローティの多文化主義への批判としては、（Rorty 1995）を参照。
- 6) 分析哲学におけるローティの研究の意義については、（富田 1996）を参照。
- 7) 柳沼良太は、ローティが「従来の権威ある古典（グレート・ブックス）だけでなく、学生の好きな小説やドキュメンタリー、ドラマ、映画、漫画、エスノグラフィ、テレビ番組なども含めている」という（柳沼 2008: 128）。
- 8) ローティがこのように「偉大」という概念を重視する背景には、1980年代後半にアメリカで繰り広げられた文

化戦争の影響があると考えられる。その論争のなかで、従来、古典として読まれてきた文献が、西欧に伝来するものばかりであったことが、西欧中心主義的であるとして批判され、非西欧の文化の古典も同様に重視すべきだということが主張された。つまり、古典をめぐる文化的な覇権争いが行われたのである。このようにそれぞれの文化の「聖典」が何かという論点ばかりが強調されることにより、文化的な枠組みを超えて古典の偉大さを主張することが困難となっていった。

参考文献

・論文

- 浜野研三 2000 「トロツキーと野生の蘭? —ローティのポストモダニスト・ブルジョア・リベラリズムの問題点」『思想』909号、46-70頁.
- 北田暁大 2003 「『徴候』としてのリチャード・ローティ」『理戦』74号、88-109頁.
- 三島憲一 2001 「終極の言語のメタファー化と戦闘的リベラリズム —ローティの二つの本をめぐる—」『思想』929号、52-73頁.
- 宮寺晃夫 2003 「リベラリズムの射程」『理戦』74号、36-53頁.
- Rorty, R. 1990a "Education, Socialization, and Individuation" *Liberal Education*, 75(4), 2-9.
- Rorty, R. 1990b "The Dangers of Over-Philosophication —Reply to Arcilla and Nicholson" *Educational Theory*, 40, 41-44.
- Rorty, R. 1995 "The Demonization of Multiculturalism" *The Journal of Blacks in Higher Education*, 7, 74-75.

・単行本

- Arcilla, R.V. 1995 *For the Love of Perfection: Richard Rorty and Liberal Education*, Routledge: New York.
- Bernstein, R. 1988 "A 'Minute of Hatred' in Chapel Hill: Academia's Liberals Defend Their Carnival of Canons Against Bloom's 'Killer B's'" *New York Times*, 25, 26.
- Bloom, A. 1987 *The Closing of the American Mind: How Higher Education has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, New York: Simon & Schuster (菅野盾樹訳、1988『アメリカン・マインドの終焉 —文化と教育の危機』みすず書房)
- E・D・ハーシュ 1989 『教養が、国をつくる。: アメリカ建て直し教育論』中村保男訳、TBS ブリタニカ.
- I・カント 2002 『諸学部之争い』角忍、竹山重光共訳、岩波書店.
- J=F・リオタール 1989 『ポスト・モダンの条件 —知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、水声社.
- McLaren, P., Farahmandpur, R., Suoranta, J. 2001 "Richard Rorty's Self-Help Liberalism: A Marxist Critique of America's Most Wanted Ironist" in Peters, A.M. and Ghirdelli, P. Jr. (Eds.) *Richard Rorty: Education, Philosophy, and Politics*, Roqman & Littlefield Publishers, INC.: Lanham, 139-162.
- 仲正昌樹 2004 『ポスト・モダンの左旋回』世界書院.
- 野家啓一 1994 「プラグマティズムの帰結 —『ノイラートの船』の行方—」新田義弘他(編)『分析哲学とプラグマティズム』岩波書店、271-301.
- Peters, M.A. 2001 "Achieving America: Postmodernism and Rorty's Critique of the Cultural Left" in Peters, A.M. and Ghirdelli, P.Jr. (Eds.) *Richard Rorty: Education, Philosophy, and Politics*, Roqman & Littlefield Publishers, INC.: Lanham.
- Rorty, R. 1979 *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press: New Jersey. (野家啓一監訳 1993『哲学と自然の鏡』産業図書.)
- Rorty, R. 1982 *Consequences of Pragmatism: Essays: 1972-1980*, The University of Minnesota Press. (室井尚ほか訳 1985『哲学の脱構築 —プラグマティズムの帰結』御茶の水書房)
- Rorty, R. 1983 "Postmodernist Bourgeois Liberalism" *The Journal of Philosophy*, 80, 583-589.
- Rorty, R. 1991a "Solidarity or Objektivty?" in *Objectivity, Relativism, and Truth: Philosophical Papers volume 1*, New York: Cambridge University Press, 21-34.

- Rorty, R. 1991b “Science as Solidarity” in *Objectivity, Relativism, and Truth: Philosophical Papers volume 1*, New York: Cambridge University Press, 35–45. (富田恭彦訳 1999 「連帯としての科学」『連帯と自由の哲学』岩波書店、1–32頁.)
- Rorty, R. 1991 *Objectivity, Relativism, and Truth: Philosophical Papers volume 1*, New York: Cambridge University Press.
- Rorty, R. 1998 *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America*, Cambridge: Harvard University Press. (小澤照彦訳 2000 『アメリカ 未完のプロジェクト—20世紀アメリカにおける左翼思想—』晃洋書房.)
- Rorty, R. 1999 “The Pragmatist’s Progress: Umberto Eco on Interpretation” reprinted in *Philosophy and Social Hope*, Penguin Book, 131–147. (S・コリーニ編、柳谷啓子、具島靖訳 1993 「プラグマティズムの歩み」『エーコの読みと深読み』136–165頁.)
- R・ローティ 2002 『リベラル・ユートピアという希望』須藤訓任・渡辺啓真訳、岩波書店.
- Rorty, R. 2006 *Take Care of Freedom and Truth Will Take Care of Itself: Interviews with Richard Rorty*, Stanford University Press: Stanford.
- 富田恭彦 1996 『アメリカ言語哲学の視点』世界思想社.
- 柳沼良太 2002 『プラグマティズムの教育 —デューイからローティへ—』八千代出版.
- 柳沼良太 2008 『ローティの教育論 —ネオ・プラグマティズムからの提言—』八千代出版
- 渡辺幹雄 1999 『リチャード・ローティ —ポストモダンの魔術師—』春秋社.